

## 戦時下の女性表現

——林芙美子「北京紀行」「中国之旅」を一例に

野田敦子

### 一 はじめに

林芙美子（一九〇三—一九五二）の戦争との本格的なかわりは、日中全面戦争開始後の一九三七年十二月、南京陥落に際し毎日新聞社の特派員として上海や南京へ赴き、「女性作家一番乗り」をした頃から始まった。翌三八年九月には、内閣情報部によるペン部隊の一員として上海に派遣されるも、途中で朝日新聞社のトラックに乗り換えて「漢口一番乗り」を果たしている。四一年一二月のアジア太平洋戦争勃発後にいたっては、四二年一〇月末に陸軍省報道部によりジャワやボルネオ、スマトラなどの南方へ派遣され現地を視察

した。林芙美子のこうした戦争とのかかわりに関して川本三郎は、「戦時中の林芙美子については戦争協力者と否定的に語られることが多いが、作品をよく読むと、そんな単純なことではないことがわかってくる」と指摘している<sup>①</sup>。近年、川本の「戦争協力者といった」そんな単純なことではない」といった見解をふまえてなのか、時局に迎合した表現を取り上げて考察するよりも、時局に対する葛藤や虚無感が見られる表現に注目して分析する論考が次のとおり見受けられる。

南京については陳亜雪が、林芙美子の「女性の南京一番乗り」（『サンデー毎日』一七巻七号、一九三八年二月六日）を取り上げて、「作中で」林芙美子が同情を示している〈女〉達は〈敵国〉中国の

〈女〉達である。「略」中国の〈女〉達に関しては〈仲間〉と見做している。すくなくとも〈敵〉としては見ていない」と述べている。<sup>(2)</sup>

漢口に関しては李相福が『北岸部隊』（中央公論社、一九三九年一月）の「東京での苦しい生活が内在されている無常観を戦場での虚無感と一致させている」点に目を向けている。<sup>(3)</sup> 南方においては拙稿で、「スマトラ——西風の島」(『改造』二五卷六—七号、一九四三年六月—七月)における方法論について、侵略戦争を断行する国家への抵抗といった観点から述べた。<sup>(4)</sup> これらのように各局面において、葛藤などが見出せる表現を分析するという一つの方向性が認められる。

しかし往時は、多くの新聞や雑誌が日中戦争を支持し、アジア太平洋戦争までのルールを敷いた。<sup>(5)</sup> ゆえに戦時下について議論を深めるならば、戦争が支持されていたという情勢や従軍作家であったという点を鑑みて、時局に沿った表現をも考察対象とし、なおかつ時間の流れのなかでテキストの文脈の意味を分析することも必要ではないだろうか。先行研究では、初出後の書籍収録時における異同や伏せ字によって、文脈の意味がどう変わったのかという考察はほとんどなされていない。だが初出以降において、どう文脈の意味が変容したのかを検証することは、どのように人々が戦争に巻き込まれていったのかを追うことに繋がり、戦時下について議論を深める一助になると考える。何らかの要請で再録が続くテキストは異同や伏

せ字により、水準の差こそあれ戦時に沿うかたちとなる傾向があるはずである。

ところで曾婷婷によると、林芙美子は一九三六年九月三〇日前後から二〇日間ほど北京に滞在したというが、林芙美子の生涯において北京行きはこの一回であった。<sup>(6)</sup> 林芙美子は旅から戻って来て「北京紀行」(『改造』一九卷一号、一九三七年一月)を発表しているが、つまりその後は再訪によって新たな北京が描出されることはなかったのである。同作は、抗日民族統一戦線の結成の契機となった西安事件(一九三六年十二月一二日)直後に発表されており時局の様相も読み取れ、後述するように女性が戦争とどう結びついていったのかが見出せる。くわえて「北京紀行」が掲載された三十七年は、事前検閲が開始されるなど出版統制史においては分岐点であった。<sup>(7)</sup> 「北京紀行」は発表後、三十七年と三十九年時の書籍に計三回収録され、次いで四〇年には、「北京紀行」と大部分が重なる「中国之旅」が中国語定期刊行物である『華文大阪毎日』(二九卷、大阪毎日新聞社・東京日日新聞社、一九四〇年一月)に発表されている。二作の内容上の接点<sup>(8)</sup>と後述する版元の関係性などから、「中国之旅」は「北京紀行」のヴァリアントに位置づけられる。さらに、『華文大阪毎日』に「中国之旅」が掲載されてから一年後、日本語と中国語併記のグラフィ誌『世界画報』(二七卷一号、東京・国際情報社、一九四一年一月)に「中国之旅」本文が中国語のみで転載されていたことを今回

初めて確認したが、興味深いことに『世界画報』の目次には林芙美子の名前とタイトルが明示されていない。転載された本文の直前に付け足された紹介文の中に、名前のみが認められる。また誌面構成にも、際立った変化が見受けられる。以上の書籍収録・掲載事情から「北京紀行」と「中国之旅」は、日中全面戦争前からアジア太平洋戦争開始前までの文脈の変化を追うことができる。

本稿では、まず「北京紀行」の初出について次の二節と三節で考察し、四節で書籍収録時における異同や伏せ字による文脈の意味の変化を見たい。五節においては「中国之旅」の誌面構成を主に検討し、六節では五節をふまえて女性表現を中心に分析する。そして最後の七節では「北京紀行」から「中国之旅」において、女性に関する様々な記述や表象がどのように展開したのか一端を明らかにしてみたい。

## 二 「北京紀行」に描かれた北京と女性

北京は古来より呼称の移り変わりがあり、そもそもは一四二二年の永楽帝時に国都として命名された。「北京紀行」の本文には「永楽年間」と示され、永楽帝が建立したとされる天壇や紫禁城などが描出されている。書く主体の林芙美子は、このような史跡が遺る旧都を一九三六年の秋に訪れた。訪問時は、南京政府成立（一九二七

年）により首都が南京に移った後で、北京は北平と呼ばれていた。林芙美子が北平を訪れる前年の一二月には、国民政府が親地方的政権である冀察政務委員会を北平に樹立し、訪れた翌年は北平の郊外で盧溝橋事件が起きている。本稿では以下「北京」表記に統一するが、このように情勢が流動する中、書く主体の林芙美子は北京を巡り「北京紀行」を発表した。

「北京紀行」の〈私〉は、北京で「大毎支局の石川順氏」を訪ね、地図と案内人を用意してもらう。そして名所とされる紫禁城や北海公園、天壇などを歩いて見学する。旧跡の壮大さに歓喜するが、しだいにそれらを権力の象徴とみなして反感を抱き、「むかしは〔略〕色々な階級が列をなして歩いてゐたのかと思ふと、雑草も一本一本気持ちわるく見えて来る」。天壇に対しては「小さな泥の家に住む住民達は、その頃、どんな思ひで、よりつけもしない、この豪華な祭壇を考へてゐたのだらう」と生活格差の点から捉えている。その天壇へ通じる前門街には乞食や阿片中毒者がおり、〈私〉は天橋通りでは銃殺されるモルヒネ患者の護送も見ると、貧民街や不衛生な場と、王宮へ続く道は繋がっていたのである。そのため〈私〉は、古代建築に見られる権力を訪問時の今に重ね合わせ、当地に対して批判的になつていったのではないだろうか。それは以下に述べる二つの背景からも読み取れる。

〈私〉は北京へ向かう前、「中秋の明月を観られるのが唯一の愉し

み」であつた。北京で「中秋節の十五夜の晩」に月を鑑賞するため「城壁へあがつて」夜空を眺めると、「澄んで光つてゐた」月があつたという。しかし、アメリカ区域の「城壁には張り紙が出てゐて、支那人の登るのを禁ずる」などと掲示されており、〈私〉は「城壁に上ることも許されない支那人達自身は、いつたいどんなことを考へて暮してゐるのか」などと案じることになる。月は先述した権力の象徴でもある城の壁に上がり鑑賞したが、〈私〉はお月見がきっかけで他国の占領を目の当たりにしたのである。

くわえて〈私〉は北京に着いた日、風呂に入りながら「色々な音が耳に来る。キリ、キリ、キリ〔略〕ブウン、ブウン〔略〕随分面白い音だ。銅鑼の音や、木魚のやうな音や、小太鼓の音や、物売りの呼び声」を聞き「温くて愉しいぜいたくな旅をしやうと」（傍点ママ）考える。そして出歩いた先での見聞をこう叙述する。

水売りは一輪車を押して、キリキリ、キリキリと云ふ音をたて、歩いているし、床屋は赤い桶を天秤にかついで、ビーン……ビーン……と棒を鳴らして通つてゐる。雑貨屋はでんでん太鼓を鳴らして行くし、文字を知らない人の為に、かうした音や、物で商売を判らせやうとしてゐるのかも知れないと、私は、歩きながら、それらを観るのが愉しみだつた。

〈私〉は現地の人々を聴覚的要素からも捉えている。つまりは、壮大な遺跡が聳<sup>そび</sup>えるもとで生きる人々を聴覚的要素により際立たせ、「愉しみだつた」とあるように好意的に示しているのである。

以上より、だからこそ〈私〉は、現地の住民たちを他国の占領から守り、また阿片中毒者等もいる状況を変えるべく、日本が立ち入るべきだと錯覚したと考えられるのである。

しかしながら「北京紀行」には、現地の夫人と〈私〉の対立も示されており、それは最も緊張する場面として次のとおり現れる。

〈私〉は、清華大学の教授で図書館主任<sup>⑤</sup>でもあつた「銭稻孫氏に連れられて」建築家の夫人に会うが、夫人から「日本の女性は、いつたい支那の女に就いて、どんな風な考へを持つてゐるのでせう」と質<sup>た</sup>される。ここでは「日本の女性」と「支那の女」が区別されている。そして夫人は二国間の関係について、「自分の家は代々の親日家で、日本には非常な好意を寄せてゐたが、いまは、何もなくなつてしまつた。〔略〕こんな風な状態になつては、最早何もなくなりましたよ〔略〕小さい生命だけは守つてやりたい」と断じる。これに対して〈私〉は、「眼をとじるより仕方が」なかつたといふのである。そして「東洋の平和は、東洋の女達もつと手を握りあつてもいゝのぢやないだらうか。市井の小さな出来事にも、亭主が何かの間違ひで隣家へ飛び込んで行つたら、あとで、妻君が出て行つて、円満に詫びるではないか」と考える。〈私〉は夫人の詰問

に背を向け、支那と日本を一括りにして「東洋」とし、二国間を同じ生活空間に置き換えて述べている。いわば、他国に対して自分たちの日常を要とした喩えをし、結束を求めているといえるが、自分たちを軸とするのは、前述したように日本が介入すべきだと考えていたからに他ならない。その介入については、以下のように提示されている。

作中には、橋川時雄（一八九四―一九八二）の東方文化事業について「橋川氏の東方文化事業のお仕事は根の座つた立派な仕事だと思つた」とある。当時の文書によれば東方文化事業は「日支両国が〔略〕協力的に、東方文化を研究」するために「東方文化事業総委員会が北平に組織」されたという。<sup>⑪</sup>一見、公平であるかのようにだが、そもそも同委員会とは他国である北京で組織されており、「東方文化事業は〔略〕しばしば『文化侵略』と」言われたものでさえあった。<sup>⑫</sup>しかし「北京紀行」には、「各外国の大資本を投じた文化侵略を視て、如何にも不器用な日本を感じないでもない」と〈私〉の見解が示されてもいるため、〈私〉は橋川が担う事業に賛同していたと読み取れる。他方、「北京紀行」には清水安三（一八九一―一九八八）の崇貞女学校のことも記されている。太田哲男によると女学校の特色は、「北京の貧民街の女子児童に教育を施そうとしたところに」あり、「慈善を施すため〔略〕ではなく、女子児童の自立を促す学校」であった。<sup>⑬</sup>さらに太田によれば、貧民街の娘は成長すると売春

を強いられたため、清水安三は貧困の女子児童に簡単な読み書きなどを教え、貧困からの脱却を目指す社会事業として学校を経営していたという。そのため乞食などを見た「北京紀行」の〈私〉にとつては、清水安三の活動も納得のいく社会事業だったのである。

こうした治安上の点からも〈私〉は、日本が介入し「東洋の女達」がもつと手を握り」あう必要性を考えていたといえるが、「東洋の女達」とは具体的にどういった女たちだったのだろうか。

この一節「東洋の女達」がもつと手を握り」以下には、「亭主が何かの間違ひで隣家へ飛び込んで行つたら、あとで、妻君が出て行つて、円満に詫びるではないか」とあり、〈私〉が東洋の女たちに、亭主に対する女性の従属性を投影しているのが見て取れる。亭主への従属性を示す表現は他に次のように作中にある。「清水安三氏に逢へたが〔略〕清水氏は崇貞女学校の校長で〔略〕支那人の娘ばかりあつてをられる。奥さんは昔の小泉いく子さんで、小さいながらも、健実な学校だつた。」と、校長である清水安三の活躍を示す一方で「奥さん」の存在をいつでもできるかどうかのように付け足したこの叙述も、例として挙げる事ができるだろう。「昔の小泉いく子さん」とは教育者の清水郁子（一八九二―一九六四）のことである。また〈私〉が対立した先の現地の夫人の名前は示されていないが、作中に建築家の夫人であり「かつてアメリカに留学してゐた」と明記されている。これらをふまえると〈私〉が示す「東洋の女達」と



は、一定の知識を持った女たちのことだといえる。

一方、北京などにいる他の日本女性については、作中に下記のようにある。「云はれたから慰問袋を送り、命令されたから国防婦人会へ這入るではすべてが空疎」などとされ、「日本の国防婦人会の婦人連中の大半は芸者達だ〔略〕愛国の前には職業に差別はないが」と「差別」される「職業」の女性が示されている。女性たちは「日本の国防婦人会の婦人連中」とされて名前も示されず、「義理で会費を払」うなど活動自体にも自主性がないとある。〈私〉は、軍事要衝である「国境の町」の山海関を通つて北京へ来ており、だからこそ国防婦人会の女性には、「云はれたから」「命令されたから」行動を起こすのではなく、自発性を身につけるべきだと望んでいたのではないだろうか。それはまた、「北京紀行」掲載から約二年後に、神近市子（一八八八―一九八二）が以下のとおり述べていることから、国防婦人会には出征者の歓送等に対する自発的な行動が望まれていたということを見出せるのである。国防婦人会は「中位以下の中産婦人達の間で結成されたのであるが、その時誰が今日の彼女達の潑刺とした活動を予期したものがあらう。」と神近は言及しており、「潑刺とした活動」を予想できなかったとされている。このため、そもそものは自発的に活動をしていなかったとうかがえるのである。

さらに神近市子は女性の団体に関して、国防婦人会を含む「愛国

団体の動きに較べると、知識婦人、知名婦人連の属する婦人団体の活動は、非常に限られている」（傍点引用者、以下同じ）と指摘していることから、女性は愛国団体と婦人団体の二つの層に大きく分かれていたと思われる。また国防婦人会の姿は「婦人大衆にとつて一つの魅力である」とも言及されている<sup>15</sup>。要するに女性の層についていうならば、「北京紀行」においても、知識のある「東洋の女達」は「知識婦人」と同等の存在と思われる一方で、国防婦人会の婦人は「婦人大衆」に分類できるといえる。「北京紀行」には、二層の女性を示されている。

こうした女性が示された「北京紀行」の文脈の意味が、のちの書籍収録・再録時における時勢の変化や本文の異同と関連してどう変化したのかを考え、それを手がかりにして、本論では最終的に戦時下の女性表現の解明に一步近づきたい。その手続きとして次節では、「北京紀行」初出における抗日の影響などを確認しておきたい。

### 三 「北京紀行」の抗日、当時の女性解放思想

まずは少し目を転じて、一九三七年一月の「北京紀行」掲載号の誌面と版元の改造社を確認したい。「北京紀行」掲載号には改造社の山本実彦（一八八五―一九五二）も執筆者として加わり、大西齋、山上正義、波多野乾一、山川均とともに西安事件をテーマにした論

考を発表している。山本実彦は「蔣介石と張学良」と題し、蔣介石を監禁して抗日を要求した張学良側を「あんな残虐な行爲をする野蛮人」と非難している。西安事件が三六年一月一二日に起きたことを勘案すると、いかに素早く『改造』でテーマが組まれたのかわかり、山本の関心の高さがうかがえるが、次に揭示するように改造社は中国と関係があった。

秦剛によると、「一九三〇年代の日本の総合誌の中、『改造』が中国関連の言論・言説を最も多く掲載したメディア」であった。<sup>16</sup> また秦は上海についてだが、「改造社が企画した中国関連の文化活動の主な成果」の「ひとつは編集者や作家の上海派遣による意図的な上海言説の生産」であったと言及し、さらに『改造』が「一九三六年六月号以降に『中国傑作小説』の欄を設け」たということも指摘している。<sup>17</sup> こうした状況を鑑みると改造社は北京とも結びつきがあったと察せられるが、鄒双双と筆者との共同調査によって得た資料「北平之秋」(『實報半月刊』一九三六年第二卷第一期)から、林芙美子が改造社に依頼されて北京を描くために、北京に訪問していたことが明らかとなった。<sup>18</sup> 要するに、改造社が中国と結びついた一連の動きの中に、林芙美子も含まれていたのである。そしてなおかつそれは、後掲の望月百合子(一九〇〇—二〇〇二)がいう「学生の大動揺」<sup>19</sup>があった流れの中においてであった。「北京紀行」はこのような背景があつて描出されていたのである。

ここで「北京紀行」の本文に戻るが、本作の約三割は軍事要衝の山海関での出来事について費やされている。〈私〉が北京を訪問する前に三日ほど過ごす山海関でのことは以下のようにある。〈私〉は朝鮮人の案内人を頼み万里の長城を見に行くも、築城にかかわった工夫の「お化けの出て来さうな風が吹きつけて来る」と思う。そして、海辺から見える長城を「全く一朝の夢にしかすぎない」と認識すると同時に、「現実の眼の前に見るこの九十九里の砂浜のやうな遠い汀には、行儀よく、黒い木札が立つてゐて「略」をかし」と疑義を呈する。木札には、イギリスやフランス、ドイツ、アメリカなどの領分が刻まれており、〈私〉は「アメリカや英国の砂浜に寝転んで、やるかたもない気持ち」になる。その後「丁度、私が浜辺にゐた時、アメリカの水兵達がロバを仕立て、」〈略〉行つてゐた列の後からビールを冷やした水樽を、天秤棒で荷なつた数人の人夫達が〔略〕歩いて行つてゐるのを見」たと示され、アメリカ兵と人夫の格差も叙述される。ここでも前節で言及したように、史跡(長城)に関連して占領が表出されている。

しかしながら、こうした占領に関わる他国の描写とは裏腹に、〈私〉の案内人である朝鮮人の置かれている立場や日本の木札の有無、野道で時々見かけたという「日本の軍用トラック」についての説明や周辺描写はほとんどなされていない。なぜだろうか。これに反して北京においては〈私〉が北海公園内の茶店で休んでいたとき、

「日本の飛行機」が現地の学生の様子とともに以下のとおり提示されている。

北海の湖上を眺めてみると、青い空の上をぶんぶん唸つて、日本の飛行機が飛んでゐた。私のそばに茶を飲みながら、本を読んでゐた黒眼鏡の一学生は、暫く本を卓上に置いて、空を見上げてゐたが、聴て私の方へ向いて、咽喉仏の見えるやうな大きなあくびをして、また静かに本を読み始めた。(傍点ママ)

ここでは「日本の飛行機が飛んで」いる空の下で、男子学生が「大きなあくび」をしながら「静かに本を読む」という状況が示されており、要するに日本軍によって治安が安定していることが提示されている。また橋川時雄によれば、かつて北京の大学は「一万五千の学徒と数百の教授を擁して」おり「北京文化の要素でもあつた」というから、<sup>(20)</sup>「北京紀行」に出てくる「一学生」も北京の学生のことだろう。学生について、林芙美子より少し前に北京へ行つた望月百合子が「いま北平では学生が大動揺をしてゐます」と言及しているが、<sup>(21)</sup>望月百合子のいう大動揺は、時期からすると、北京の学生が一九三五年一月九日に天安門広場で抗日救国運動を起したことに関連すると推測できる。

ゆえに、西安事件を非難する『改造』における先の特集や、秦剛

が指摘する改造社と中国との関係、男子学生の「あくび」をふまえるならば、「北京紀行」において山海関で日本の占領についての記述が不明確であつたのは、一連の抗日運動の影響と断定を避けるためだという側面があつたといえる。「北京紀行」に「私は、政治的なことは何も知らない。「略」一旅行者に過ぎない」と記されてもいるが、本作では抗日運動に関する描写を避け、日本軍によって治安が安定していることが示されているのである。

ところで、「北京紀行」が発表された頃の出版物全般の状況は、「昭和十二(一九三七)年の前半では月平均一六五冊の発禁であつたものが、後半には月二六四冊に増加し「略」さらに翌十三年には「略」合法的に出版物の統制」があり、「こうして昭和十二年から十六年までの五年間に約一万冊の図書が、「発禁」処分を受け」た状況にあつたという。<sup>(22)</sup>本稿で、「北京紀行」から「中国之旅」の文脈の意味を辿る時期は、まさにこの期間と重なっている。また、女性の生活においてもたとえば「昭和十年、国産のパーマネント機が作られ急速に普及し始め」たが「早くも二年後の十二年には「パーマネントはやめましょう」のかけ声が始まり、十四年には追放される」といった変化があつた。<sup>(23)</sup>

このように女性の生活が規制されていくなかにもあつて、女性たちは、女性解放思想に繋がった国民精神総動員運動(一九三七年)と国家総動員法(一九三八年)に関心を寄せ、影響を受けたものでは



ないだろうか。戦時下の女性解放思想について林芙美子を軸にした先行論は管見では見当たらないが、長谷川啓は、田村俊子（二八八四—一九四五）が林芙美子のことと言及した「婦人の能力」<sup>24</sup>を用いて次のように指摘する。「〔田村俊子は〕林芙美子と吉屋信子が婦人作家の代表として従軍作家に参加することの意義を説き、政府の要望にしたがって国民精神総動員下における女性の能力の發揮を促し」<sup>25</sup>たという。そして長谷川によると、「国家総動員法がこの年の四月一日に公布され、女性の能力活用政策が始まってもいた。俊子の生涯にわたる女性解放思想は大陸に渡った後も変わらず、日本帝国主義国家の女性活用の意向に重なり、促進していく。戦争と女性解放はある意味で矛盾しない。女性の能力を發揮する場でもあった」というのだ。<sup>26</sup>さらに長谷川は、「婦人運動が掲げた『女の社会進出』という要求さえ体制の強化に繋がりを、田村俊子で追跡してきたような事態となる」とも指摘している。<sup>26</sup>

ここで、林芙美子が北京に赴いた一九三六年時をいったん確認するが、矢澤美佐紀によると、同年に連載された佐多稲子（一九〇四—一九九八）の「くれなる」は、「家庭と仕事の間で苦悩する女の姿を赤裸々に書くことで〔略〕女性解放への強い決意が込められてもいた」という。<sup>27</sup>

つまり「北京紀行」が発表された三七年一月には女性解放思想が背景にある作品があり、さらに「北京紀行」が書籍に収録・再録さ

れていく時期は先に見たとおり出版統制がある一方で、国策と女性解放思想が結びついていく時期に重なっていた。それゆえ本稿では女性解放思想の観点から最終的に考えたいのだが、次節では「北京紀行」を書籍に収録する際に生じた顕著な異同等を見ていきたい。

#### 四 「北京紀行」の異同、「知識婦人」「婦人大衆」

考察に入る前に、「北京紀行」の収録・再録事情を整理すると、次の①から④のとおりとなる。

- ① 一九三七年一月、『改造』一九卷一号に発表
- ② 一九三七年四月、『田舎がへり』（改造社）に収録
- ③ 一九三七年七月、『私の旅行』（改造社）に再録
- ④ 一九三九年七月、『私の紀行』（新潮社）に再録

以下、本稿において「①」と表示する場合は、①の「北京紀行」つまり初出を意味している。それでは順に異同を見ていきたい。①から②へは目立った異同はないが、③では文末等に異同が確認でき、④に至っては伏せ字も施されている。はじめに一九三七年の①から③の文末の異同について確認する。

- ① ②の末尾は「私は長い白河を汽船で帰（へ）つて来た。」と締

めくられてゐるのに対して、③では「私は長い白河を汽船でゆるく、帰つて来た。」と変化している。そして①と②の文末には明記されていなかった年月が、③に至つては「昭和十一年十月」と付け足されている。つまり③の「ゆるく」という点に留意するならば、時間の進行は「ゆるく」と速度を落とし、文末に記された「昭和十一年十月」とともに、日中全面戦争前で止まっていることを読む者に認識させる。要するに、同じ一九三七年時の収録であつても、時間表示の強度は③で増しているのである。

③の発行年月でもある三七年七月は、開戦にくわえ雑誌が対象ではあるが事前検閲が開始されており、二か月後の九月には、内閣情報委員会が内閣情報部に改変されて情報官を設置し、言論と出版統制の強化が図られる状況にあつた。そのため③の時間の強調は、三節で見た「あくび」表現とともに、日本軍によつて治安が安定していたという錯覚を読者に印象づけたといえるが、同時にこれは侵略戦争の肯定に繋がつていったのではないだろうか。それというのも、③で読者は当地の治安は日本軍によつて安定していたと解するのだから、北京に入城するなどして全面的な侵略に乗り出した日本軍を肯定的に捉えることになるからだ。さらに佐藤卓己によると、約一年後の三八年九月からペン部隊として吉屋信子（一八九六一九七三）と繰り広げた林芙美子の従軍報告は、「漢口に「一番乗り」した林報告の方が強度と精度において圧倒して」いたというか

ら、林芙美子の影響力も読者に関係したと思われる。

この③から④への移行期である三八年五月の『婦人之友』には、阪谷希一ほか「北支を如何に住みよいところとすべきか（北京座談会 三月三十日夜北京ホテルに於て 北支を住みよい天地とするために）」が掲載されている。<sup>(39)</sup> 座談会では「北支移住、大陸経営も、すでに呼声や空想の時間を過ぎて、厳しき段階に入つた。さうして国民がその生活をもつて進出しなくてはならない時が」やつてきたとあり、次いで「北京は最近二三ヶ月の間に一千八百だつた日本人が遂に一万を突破」と示され、<sup>(40)</sup> 「事変後、〔略〕日本人が毎日潮のやうに北京に入つて行く」と指摘されたりしている。<sup>(41)</sup> ①が発表された頃、北京の日本人の人口は男性が一〇七八人で女性は七四六人であつたというから移住の増加がうかがえるが、座談会で「日本人が北支に深く根を下すために」必要な条件を問われた出席者の阪谷希一は「女の人同士が互ひによく知り合ふことこそ、ほんたうの意味で理解し合ふ一番よい道だ」と答えている。<sup>(42)</sup> また、前掲の神近市子も同年一二月に次のとおり説いている。

大陸の経営といふことには大陸に止まる国人だけでなく、我々を敵視しない支那良民の教導、教育、宣撫等から實際生活のレベルを上げて医療、衛生から、産業と生活との技術の指導等々までしなければならぬ。〔略〕これを〔略〕婦人の協力なし

にやれるだらうか。〔略〕特に宣撫教導等のことにかけては、ある場合男子よりも婦人の方が便利であり効果的である<sup>36)</sup>

座談会と神近市子の言説をふまえるならば、「女の人同士が互ひによく知り合ふ」ということ以外に、日本女性は中国の人に対して「宣撫教導等」を求められていたということになる。ここで想起されるのが「北京紀行」の「東洋の女達がもつと手を握りあつてもいゝ」という「知識婦人」についての叙述である。「知識婦人」とつては「宣撫教導等」をすること、社会進出となり女性解放思想に繋がる状況にあつたのである。いわば「国民がその生活をもつて進出」（座談会）するにあたり、「北京紀行」は日中間の生活の共同化を促す方向性に沿うものであつた。それではこの頃の日本国内と、もう一方の層の「婦人大衆」の状況はどうだつたのだろうか。高良富子（一八九六—一九九三）は、神近と同じく三八年一二月発行の同誌で、以下のとおり述べている。

高良富子によると、「統制国に於ける婦人や家庭の活動が報ぜられて、此の處日本の婦人も「家庭に帰れ」「御母様家に帰つて下さい」等と〔略〕聞かれて居る。けれども現実には、益々婦人大衆を、〔略〕軍事奉仕に、家庭防火群に、講演会、講習会にと、家庭から外に誘ひ出しつゝあるという。<sup>37)</sup> また高良富子は「婦人の地位向上運動も、時局に便乗的に解決するのではないかとの、予感と云ふか、

云はず語りの期待が、婦人の心を風靡したやうな証左が、吉岡、山田女史らの就任祝賀会には、明かに見られた。」とし、「目覚めた指導婦人は、読書や博識から来る理想と、高い望みとは持つて居り乍ら、なほ大衆婦人は、呼べども答へず」という状態が長く続いて来たとしても、「国策に乗つて、政府の役人達も、婦人指導者に訴へ、婦人達も、この際の御奉公とばかり、大重になつて働いて居る」と述べている。<sup>38)</sup> つまり内地においては「知識婦人」が、「益々婦人大衆を〔略〕家庭から外に誘ひ出し」て講演会などで指導していた状況があつた。

また、「北京紀行」で示された国防婦人会は③から④のこの時期において、「婦人大衆にとつて一つの魅力」ともなつていた。<sup>39)</sup> そのため③から④の期間の「北京紀行」は、読者でもあつただろう日本の「婦人大衆」を一段と「家庭から外に誘ひ出し」たともいえる。しかしながら先に提示したように、「婦人大衆」は教示を得るといった受け身の立場であり、それと同時に、「家庭に帰れ」という要求もあつた。それゆえ「婦人大衆」は、「知識婦人」と違つて結局のところ、講演会への出席などにとどまる傾向があつたと察せられ、女性の能力活用政策を社会進出の面から考慮すると矛盾を孕んでいたといえる。そうすると③から④の「北京紀行」は「婦人大衆」に、矛盾を孕む女性解放思想を抱かせたということになる。

④へ展開するまでにこうした社会情勢があつたが、④では学生の

「あくび」や、日本への信頼を喪失した建築家の夫人の直言「いまは、何もなくなつてしまつた。」「最早何もなくなりましたよ」が伏せ字になっている。どういふことだろうか。

④と同じ三九九年に発表された小山いと子（一九〇一—一九八九）の「北京」には、「北京は」日本の国の威信が厳として在る」ため過ごしていても「少しも不安が」ないなどとあり、安定した北京の秩序が示されている。<sup>(40)</sup>だが実際は、開戦後は現地の「学徒の大半は四散し、四つの国立大学は閉鎖し」て、<sup>(41)</sup>学生が置かれた状況は散々で抗日は鎮まるところか激化していた。<sup>(42)</sup>また④の頃は北京への移住者も増えていたが、小山いと子は「支那の女は男よりもつと働きません」といったことや、「慾をいへば円満とか和氣といふものに乏しい」とも記している。<sup>(43)</sup>つまりは「東洋の女達がつと手を握り」あつたり「宣撫教導等」をしたりする必要性が増していたのである。したがつて、④において「あくび」等が伏せ字となつたのは、抗日や反発が抑圧できないほど激しさを増し、「あくび」等の文脈が日本を侮蔑したり非難したりする意味へと変化していたからであつたといえる。しかも④には、③に明示された時間の強調が引き継がれているため、④も読者に対して日本の侵略を正当化するものとして機能したと考えられる。「北京紀行」に日本軍の記述はほとんどなくとも、本作は「知識婦人」が北京に移住する積極的な姿勢や社会進出に繋がり、また「婦人大衆」においては、矛盾を孕んだ

女性解放思想に繋がる戦時体制への参画を促したといえる。

他方、陸軍情報部長であつた清水盛明（一八九六—一九七九）が「日本を知らず日本人を知らない〔略〕外国人大衆」に向けて「対外宣伝」をする必要性を説いたりしていたが、日本は中国の便衣隊の青年を鎮圧するも結果として治安の悪化を招いていた。そのため、ひとつに武断ではなく「文化」によつて解消しようとし、次に見る「中国之旅」という中国語のヴァリアントが生まれたのではないだろうか。次節で述べる書誌的事項の背景や、二作の題材が似通っていることから、「中国之旅」は「北京紀行」のヴァリアントと考えられ、より国策的な方向性が見受けられる。

## 五 「中国之旅」の書誌的事項と誌面構成

はじめに「北京紀行」の版元である改造社について改めて確認しておきたい。改造社は中国と繋がりがあつたが、既述のとおり「北京紀行」の〈私〉は「大毎支局の石川順氏」つまり北平天津支局長の石川順<sup>(45)</sup>と北京に着いてから会つていた。林芙美子が改造社の依頼により「北京紀行」を発表したことをもふまえると、石川順の存在は「北京紀行」発表時における改造社と大阪毎日新聞社の関係をも示唆させる。<sup>(46)</sup>また谷口絹枝によると、画家の長谷川春子（一八九五—一九六七）も一九三七年一〇月下旬から三八年正月まで「大阪毎

日新聞と雑誌改造の特別通信員として<sup>(47)</sup>「北支戦線などを巡っていたという。

こうした流れのある中、四〇年に発表された「中国之旅」『華文大阪毎日』二九巻、一九四〇年一月）の版元も大阪毎日新聞社であった。羽田朝子によると、「中国之旅」が掲載された『華文大阪毎日』は、一九三八年一月一日に大阪毎日新聞社と東京日日新聞社によって創刊され、四五年五月まで日本支配下にある満州や華北地方で発売された、影響力が最も大きな中国語定期刊行物だったという<sup>(48)</sup>。つまり改造社の囑託による林芙美子の北京訪問と石川順、そして長谷川春子の状況をもふまえると、改造社は大阪毎日新聞社や『華文大阪毎日』と何らかのかたちで繋がっていたと考えられる。

羽田は『華文大阪毎日』について、日本の国策を中国語で宣伝した文芸欄に限っては一定の自由が認められていたと分析している。だが果たしてそうだろうか。「中国之旅」は「随感」欄に掲載されているものの、『華文大阪毎日』は林芙美子を南京陥落時に特派員とした新聞社から発行されていたし、三八年に林芙美子が漢口で一番乗りを果たして朝日新聞社系で人目を引く言動を取っていた頃からそれほど時間は経っていない。また長谷川春子の北支戦線訪問に関係した社でもある。そのため国家体制と距離を置かなかった林芙美子は、国策PRの担い手として掲載誌に期待されたのではないだろうか。以下に示す軍報道部と出版社とのかわりからも、「中

国之旅」が国策に無関係ではないと考えられるのである。『改造』の編集者であった水島治男（一九〇四—一九七七）は次のとおり回想している。

昭和十二（一九三七）年十一月「略」以来、硬派、総合雑誌の四社（中公、改造、文春、日評）と軍報道部との関係は、毎月定例会議を持つことになってきた。「略」飼いならされて行くことになる。「略」今にして思えば編集の自主独立権を徐々に侵蝕されて行ったことはたしかである<sup>(49)</sup>。

さらに水島治男は「中国之旅」掲載年にあたる「昭和十五年から十六年にかけて」は、「私が上海・北京にいた期間「略」太平洋戦争第二次世界大戦を決行するにあつたつのファッショ化への体制づくりの完成の時期」であつたとして、軍報道部と出版社との密接した関係について述べている<sup>(50)</sup>。また、「中国之旅」が発表された年の「昭和十五年五月七日、内閣情報部の中に新聞雑誌委員会を設置し、軍国主義的な国策のPRをしない雑誌社には紙を回さない」仕組みもできる状況下にあった<sup>(51)</sup>。そのため同作も、国策と無関係ではないと考えられる。

「中国之旅」には、「北京紀行」の〈私〉が日本の介入の必要性を錯覚した要素である、権力の象徴としての故宫と築城に関わった



人々の悲劇、そして訪問時の庶民の生活音が引き続き示されている。こうした視角から「中国之旅」と「北京紀行」に接点があることから、日本の侵略を正当化する要素を見出せる。「中国之旅」は発表から一年後、発行地が東京のグラフ誌『世界画報』（二七巻一号、一九四一年一月）に再掲されたが、『世界画報』の掲載頁には、国策にかなう誌面の組み方が以下のとおり見受けられるのである。

このグラフ誌には日本語と中国語が全体的に併記されているが、それにも拘わらず「中国之旅」は中国語のみで再掲されている。本文掲載頁においてもタイトルは示されておらず、名前については、本文の直前に付け足された紹介文の中に「林芙美子さん」と二回示されている。また本文掲載頁には後述する惹句三本と風景写真二点が付け加えられている。つまり、紹介文中に「林芙美子さん」を二度繰り返し出して、惹句「一人の日本人女性作家の中国に対する印象」を真正面に配置したりして、影響力のある「女性作家」を押し出す誌面構成がなされているのである。これは『華文大阪毎日』の誌面に見られないばかりか、「北京紀行」の①から④にも見受けられなかった現象である。

しかし『華文大阪毎日』と『世界画報』掲載の本文自体に大きな異同は認められない。そのため誌面構成の変更がなされた『世界画報』掲載分を見ていきたい。

『世界画報』の表紙には「新東亜建設之春」と打ち出され、表紙

の裏には「西には独逸の盟邦あり、東には満州帝国、新支那国民政府あり、明けゆく新春と共に日本帝国の前途は洋洋、世界新秩序を目指して、国民よ、祝でたき限りではないか！」と二か国語で示されており、日本を中心とした「新秩序」構築のためのカラーが強い誌面となっている。「中国之旅」が発表・転載された一九四〇、四一年は、「東亜新秩序」（一九三八年）から「大東亜共栄圏」の理念が唱えられた頃であり、日中戦争が膠着状態になっていた。本文掲載頁に示された惹句三本は文字のポイントが大きく、先の「一人の日本人女性作家の中国に対する印象」以外には、「知識青年の大半が欧米化」と「雄大な山河が永遠に記憶に残る」が向かって右側に配置され一目でわかるように示されている。そして紹介文は次のとおり要約することができる。

各国には長所や短所があります。各民族には賞賛すべき点もあれば、悪い点もあります。〔略〕他国と接触すれば、長所短所が簡単に分かり、国や民族の素質向上に大いに役立ちます。日本の著名な女性作家林芙美子さんは、最近自分の目で見た中国を次のように書きました。〔略〕どこが我々は見えておらず、すぐに改善しないといけないのか。以下は林芙美子さんの随筆です。

冒頭で「各国には長所や短所があります」と「各国」と示しながら、末尾では「どこが我々は見えておらず、すぐに改善しないといけないのか」と「我々」の問題にすり替えられている。教示的な紹介文になっており、日本が指導的立場にあるということが印象づけられている。

以上の誌面構成をふまえて、次節では「北京紀行」の本文とも比較しながら、『世界画報』掲載分の女性表現を中心に考察したい。なお、前記したとおり『世界画報』には本文のタイトルが示されていないが、『華文大阪毎日』掲載本文と大きな異同が認められないため、以下『世界画報』に掲載の本文も「中国之旅」と記すことにする。

## 六 『世界画報』掲載分の女性表現と「林芙美子さん」

まず男性に関する表現を確認しておきたい。北京について叙述されている場面に「若い知識階級の男性は、みな欧米化しあまりいい印象はない」とあるのだが、これに類似する叙述は「北京紀行」①から④にもあり、「[男女共学の生徒たちは]アメリカ的な臭みも感じないではない」とされている。この頃、日本はイギリスやアメリカとの対立も激化していたため、「北京紀行」④から読み取れた抗日の学生を、「中国之旅」本文では鎮めることを目的に男性に絞つ

て示されたのだろうか、『世界画報』の誌面においてはそれを段階的に印象づけるように構成されている。まず惹句に「知識青年の大半が欧米化」とあり、ついで紹介文には「改善しないといけない」点があるとされて、要するに惹句から紹介文そして先の本文へと順を追って、中国人男性の改善すべき点が明示されているのである。これに対して、女性表現は次のとおり見受けられる。

「北京紀行」①から③で最も緊張する場面に見られた夫人の直言は、四節で述べたとおり④に至って伏せ字が施されているが、「中国之旅」においては、夫人と〈私〉の対立場面自体が削られており全く示されていない。しかも「中国之旅」本文には、〈私〉が「中国の女性はみな健康できれいで気前が良く、話し方もとても上手だった」と称賛するこれまでにない叙述が、北京を描出する場面で見受けられる。さらに最後は「今度は中国の奥さんに招待されて行きたい」と前向きな姿勢で締めくくられている。本文直前の紹介文にも「林芙美子さんは、最近自分の目で見た」とされていたように、「北京紀行」③④での時間表示とは異なり、『世界画報』掲載分では「最近」「今度」とし、直近のこととして示されているのである。

つまりは「中国の女性はみな健康できれいで気前が良」い、「今度は中国の奥さんに招待されて行きたい」などと、「最近」の日中間の女性は友好的であると読み取れるようになっていく。四節で揭示した一九三八年時における神近市子の発言「特に宣撫教導等のこ

とにかく「略」婦人の方が便利であり効果的である」をも想起すると、「中国之旅」本文の「話し方もとても上手だった」は、中国女性に対する「宣撫教導等」が進展してのことだといえる。ゆえにここからその先は、中国男性への「宣撫教導等」を「知識婦人」が担うありようが見出せる。「知識婦人」を軸にして、「最近」の中間の女性性は親和的關係にあるのだから中国の男性も変わらねばならないと、読者に思わせようとしているのである。

では「婦人大衆」はどのように描かれているのだろうか。実は「中国之旅」においては、日本の「婦人大衆」は示されていない。そうすると四節で指摘した③から④における「婦人大衆」の女性解放思想の矛盾は、この時点では完全な矛盾となっていたのではないだろうか。なぜなら同じように「中国之旅」に至って省かれた叙述については、次のとおり意味が反転したため描出されなかったと読み取れるからである。

「中国之旅」では「あくび」表現も示されておらず、「北京紀行」で事業をしていた邦人男性も示されていない。「北京紀行」における男子学生の「あくび」表現の意味は、時間の経過とともに変化して日本を侮蔑する意味を帯び、④で伏せ字となった。この状況が続いていたため「中国之旅」では「あくび」が省かれて、中国人男性の「改善しないといけない」点が示されたと考えられる。「北京紀行」で示された事業を担う邦人男性も、中国の人の反発を煽るため、

「中国之旅」には示されなかったのだろう。つまり「婦人大衆」においても、女性解放思想が完全に幻想と化していたので、提示されなかったと推測できるのである。

以上をふまえると「中国之旅」では、この時点で不利になった「北京紀行」の文脈を覆い隠し効果的に読者を教化するために、先述した誌面の編成がなされたといえる。しかしながら紹介文中において「林芙美子さん」が二度示されて強調されたのはなぜだろうか。

それは、「婦人大衆」等を描いた『放浪記』（改造社、一九三〇年七月）が出世作となり、以後活躍して、従軍作家といった地位までのぼりつめた林芙美子が、女性の社会進出や能力発揮をまさに具現化した存在であったため、人々を誘導するうえで最適であったからではないだろうか。ことに林芙美子の『北岸部隊』は『放浪記』と同じ形式の日記体であったし、『戦線』（朝日新聞社、一九三八年二月）の「（一信）」には「ねえ、私は昔、家がなくて空家に帯を敷いて寝たこともありましたが、私はあの日から、一足飛びにこの戦場へ来たやうなそんな気持ちです。」といった叙述さえあり、『放浪記』を描いた林芙美子が戦争の最前線に行き、社会的な耳目を引く一定の地位についたことは、往時においても一目瞭然であったことだろう。

林芙美子の従軍記については、「実に潑刺として行動的で、従軍部隊の報告のなかでは、どの人よりも興味が深かった」などと評さ

れており、男性の従軍作家が多いなかにあつて林芙美子は、行動的で興味深い報告をしている点に注目され、能力発揮の観点から評価されている。そんな林芙美子の従軍を「知識婦人」でもある田村俊子が称賛していたように、林芙美子は「知識婦人」と「婦人大衆」のどちらの層においても、受け入れられる傾向があつたのではないだろうか。『戦線』刊行後に発行された長編『波濤』（朝日新聞社、一九三九年七月）を宣伝した広告の文言には、「いつも私達の傍らにゐる林さん」<sup>(54)</sup>とあり、広く女性の読者に親しまれる存在であつたといふことがわかる。

林芙美子は「多くの前線ルポを書き残し（略）「報告報国」の第一人者」<sup>(55)</sup>であつたとされているように、まさに戦時下における女性の社会進出を体現した存在であつたのである。これまで指摘されてこなかったが、林芙美子は女性解放思想を体現し、人々に影響を与えた存在であつた。だからこそ『華文大阪毎日』に「中国之旅」が発表されたのち、『世界画報』に「林芙美子さん」と紹介されて本文が再掲されたのだろう。林芙美子のイメージが言説空間で活かされて、『世界画報』の誌面が編成された局面が見出せる。<sup>(56)</sup>

誌面の編成については、添えられた図版からもうかがえる。二点の図版「北京の停車場」と「杭州岳武墓」は、本文と直接関係のない写真であるが、とくに「北京の停車場」は、中国の古都の一つである北京の、平時の生活を想起させる。さらに、惹句「雄大な山河

が永遠に記憶に残る」<sup>(57)</sup>は、際限もなく広がる山河の雄大さを思い起こさせるが、そうすることで変わらない自然が押し出されて全面戦争前を読者に想起させ、侵略戦争による混乱を感じさせないようになっている。すなわち、一見、政治性のない写真や文が政治性を帯びるという事実も『世界画報』からは読み取れる。『世界画報』は奥付によれば日本国内と「海外」の読者に直販されてもいたため、侵略を有効的に進めようとしたありようが認められるが、これにより、女性表現と侵略戦争の密着性も一段とうかがえる。

## 七 「北京紀行」から「中国之旅」に至る女性表現

林芙美子は女性解放思想の影響を人々に及ぼした作家であつた。しかし見落としてはならない点は、「婦人の地位向上」や女性解放への期待は、著名な女性らの実感によつて抱かれていたということである。<sup>(58)</sup>

そうすると、林芙美子や田村俊子<sup>(59)</sup>らと違い著名でもなく、特別な活動をなし得なかつた大多数の「知識婦人」も、早くから矛盾が表面化した「婦人大衆」と同様に、家父長制の概念が生活から完全に消え去ることは結局のところなかつたと考えられるのではないだろうか。たしかに、『世界画報』に見受けられた、若い中国人男性をただそうとする誌面構成は、「知識婦人」が主導的となつて中国の

男性を変わらせねばと読み取れるようになっており、一見、男性が中心だという価値観が転倒したように見受けられる。しかしながら内実は、以下に見るとおり「北京紀行」から「中国之旅」において、家父長制の概念が存在するまま女性表現が展開されていたと考えられるのである。

ここでいう女性表現とはテキスト上の女性に関する様々な記述や表象のことであるが、二節で見たように「北京紀行」には、「知識婦人」の亭主への従属性と日本を軸とする思想が見受けられた。また同作には「知識婦人」「婦人大衆」が描かれていたが、これらを三節で言及した女性解放思想と関わらせて、「北京紀行」収録状況をふまえながら文脈の意味の変化を四節で追った。四節で言及したように①から②では顕著な異同は見受けられなかったが、③から④においては時間の強調等がなされていた。異同をふまえると「北京紀行」は侵略戦争の肯定に繋がったといえたが、他方で次の情勢を押さえて「知識婦人」について考察した。

一九三八年時、日本人が北支に根を下ろして生活するためには、「女の人間同士が互ひによく知り合ふこと」が大切だとされた一方で、「日本の」婦人の協力なしにやれるだろうか〔略〕特に宣撫教導等のことにかけては、ある場合男子よりも婦人の方が便利」などとされていた。だが翌三九年は、「支那の女は男よりももつと働きません」といったことや「慾をいへば円満とか和氣といふものに乏し

い」という状態が見られた。四節ではこうした状況下において、「東洋の女達がもつと手を握りあつてもいゝ」とした「北京紀行」に「宣撫教導等」を反映させて読み、「知識婦人」の社会進出となり女性解放思想に繋がるとした。しかし、日中間の女性の親和性が読み取れる「中国之旅」に置き換えて読むならば、見方が反転するのである。

「中国之旅」には五節で確認したとおり、国策にかなう誌面構成が『世界画報』掲載分において見受けられた。そして六節で言及したように「中国之旅」本文には、「中国の女性はみな健康できれいで氣前が良」い、「今度は中国の奥さんに招待されて行きたい」などと示され、本文直前の紹介文には「最近」ともあり、最近の二国間の女性は友好的であると読み取れるようになっていた。また本論で提示しなかったが「中国之旅」掲載の『世界画報』が発行された一九四一年一月、政府が結婚の早期化を促す「人口政策確立要綱」を閣議決定してもいた。いわば「中国の奥さん」との関係が改善し、日本人の結婚が促されていた四一年にあつては、日本人男女の入植と結婚は進む。だが侵略戦争は終わつておらず泥沼化しており、「中国之旅」においては、中国人男性の教化が「知識婦人」に求められていた。「婦人の方が便利」とされた「宣撫教導等」は、依然、中国で必要とされ「婦人の協力」が求められていたのである。

③から④の移行期にあたる一九三八年頃から三九年時は、こうし



た要請が日本の「知識婦人」の女性解放思想に繋がった。しかし、そもそも女性たちは「便利」「協力」といった主導的ではない立場から中国女性に指導することで、侵略に寄与することが求められた。そのため侵略戦争が進む「中国之旅」掲載時において「知識婦人」が、配偶者となる日本の男性入植者に「協力」する立場で、「宣撫教導等」を担ったことは想像に難くない。つまり「婦人大衆」の女性解放思想が幻想と化したように、特別なことをなし得なかった大多数の「知識婦人」にも依然として家父長制の概念が生き残り、確固たる自己確立からは遠いまま女性表現が展開されていた。二節で見たとおり「婦人大衆」の大半は「差別」される「職業」に就く「国防婦人会の婦人連中」と示されていたが、四節で言及したように「知識婦人」は「婦人大衆」に教示する立場にもあった。したがって本稿で追った女性表現からは、こうした女性間のヒエラルキーにより生じたそれぞれの立場で戦争に巻き込まれ、女性解放思想がしだいに幻となるありようが認められた。

「北京紀行」①から『世界画報』の「中国之旅」における女性表現の内幕は、戦時の意向である女性活用や女性の社会進出に重なりながらも、家父長制の概念が潜在化したまま展開されていたのであった。それはまた、侵略戦争に重要な都である北京という場にかかわり示されていた。そして、日本がこうした矛盾を内包しながらアジア太平洋戦争に突入していったということをふまえるならば、

家父長制の概念の潜在化は、ひいては兵隊となる男性の地位を家庭内で保持することに繋がったといえる。「北京紀行」と「中国之旅」からは、戦争を遂行するうえでいかに女性やその表現が要となっていたのかが見出せる。

## 註

- (1) 川本三郎『林芙美子の昭和』（新書館、二〇〇三年二月）に付された帯文より。同様のことは三八〇頁にも記されている。
- (2) 陳亜雪「林芙美子の南京視察旅行」『内海文化研究紀要』四二号（二〇一四年三月）、一二頁。
- (3) 李相福「戦場における林芙美子の無常観——『北岸部隊』『戦線』を中心に」『浮雲』九号（二〇一七年一〇月）、四頁。また『北岸部隊』については、五味淵典嗣「曖昧な戦場——日中戦争期戦記テクストと他者の表象」『昭和文学研究』六九集（二〇一四年九月、のち『プロパガンダの文学——日中戦争下の表現者たち』共和国、二〇一八年五月に収載）の四五—四六頁において、作中に見受けられる批評性が指摘されている。
- (4) 拙稿「丘の上に咲く朝顔——林芙美子「スマトラ——西風の島——」の方法をめぐって」『比較メディア・女性文化研究』創刊号（二〇一八年一月）、一七九頁。
- (5) 筒井清忠『戦前日本のポピュリズム——日米戦争への道』（中央公論新社、二〇一八年一月）、二六〇—二六三頁や二七三—二七五頁など。
- (6) 曾婷婷「越境と桎梏のはざま——試論林芙美子「うき草」」『浮雲』八号（二〇一六年一月）、四頁。
- (7) 吉田則昭『戦時統制とジャーナリズム』（昭和堂、二〇一〇年六月）、

一八三頁。

- (8) 曾婷婷「林芙美子の国都文化体认——一九三六年的北京」(『スターワールド』二〇一四年)の三頁にも「北京紀行」と「中国之旅」の内容は重複すると指摘されている。

- (9) 鄒双双『文化漢奸』と呼ばれた男——万葉集を訳した錢稻孫の生涯(東方書店、二〇一四年四月)、二五三頁と二五四頁。

- (10) 註(4)の拙稿において、今川英子「林芙美子のアジア——日中戦争と南方徴用」『アジア遊学』五五号(二〇〇三年九月)や平岡敏夫「林芙美子が見た中国(戦前)——「北平の女」「北京紀行」「上海の女」」(『世界の中心の林芙美子』発行人清水正、発行日本大学芸術学部図書館、二〇一三年一二月)の先行論と往時の言説をふまえ、内地と外地の女性の日常生活が共同化される視点のあることを指摘した。

- (11) 北平人文科学研究所編『東方文化事業総委員会並人文科学研究所の概要』(北平人文科学研究所発行、一九三五年)。

- (12) 引用箇所は、村田雄二郎担当の「解説」(『敵か友か』1925—1936)『岩波書店、二〇一六年四月)、二七五頁。

- (13) 太田哲男「崇貞学園・桜美林学園と清水安三」『アジア文化研究別冊』二二号(二〇一六年)、三三頁。

- (14) 神近市子「銃後婦人論——日本の婦人達は今何をしてゐるか」『NIPPON』日本版、一卷二号(一九三八年二月)、二五頁。

- (15) 同右書、二五頁。ここでは「婦人大衆」が、出征者の歓送や帰還者歓迎、戦傷者の慰安などに対して、実によく働いていることについて言及されているが、その割烹着の制服姿が「婦人大衆」にとって魅力であるようになって示されている。

- (16) 秦剛「戦前日本出版メディアの上海ルート——内山書店と改造社の海を越えたネットワーク」『日本近代文学』八九集(二〇一三年一月)、二〇四頁。

- (17) 同右書、二〇四—二〇五頁。

- (18) 鄒双双氏と二〇一七年一月より、日中両国に存在する資料を共同で精査したが、その結果については、『日本研究』六〇集所収の別稿に譲りたい。なお、本稿で取り上げた「北平之秋」には、林芙美子が改造社に依頼されて訪問したことが明記されているが、これは「北京飯店裏 林芙美子女史訪問記」『華北日報』中華民國三十五年(一九三六年)一月三日付の叙述を確証させるものであった。

- (19) 望月百合子「北平第一信」『輝ク』三六号(一九三六年三月)より。

- (20) 橋川時雄「北京文化の再建設」『改造』臨時増刊号(一九三八年一月)、一六頁。

- (21) 望月百合子「北平第一信」註(19)前掲書より。

- (22) 「戦争と出版物」(『第十回企画展 雑誌に見る戦中戦後』徳島県立図書館、一九九五年一〇月)。

- (23) 同右書。

- (24) 田村俊子「婦人の能力」『東京日日新聞』一九三八年九月一六日付。

- (25) 長谷川啓「女性作家のアジアへのまなざし——帝国主義日本の植民地・半植民地支配とその表象」(新・フェミニズム批評の会編『昭和前期女性文学論』翰林書房、二〇一六年一〇月)、二四二頁。なお長谷川が取り上げている田村俊子の言説については、「復刻版『田村俊子全集 第九巻』(ゆまに書房、二〇一六年一〇月) 監修者・黒澤亜里子及び編集部、そして谷内剛、西田勝の発掘によるものである。」と明示されている。

- (26) 同右書、二四五頁。

- (27) 矢澤美佐紀「抵抗の時代」(佐多稲子研究会編『佐多稲子アルバム 凜として立つ』菁柿堂、二〇一三年八月)、七九頁。なお「くれなゐ」は、同書の谷口絹枝作製「略年譜」によれば、『婦人公論』にて一九三六年一月から五月に連載された。

- (28) 「北京紀行」①で「帰へつて」とされているのに対して、②では「帰つて」

- となり、送り仮名に違いがある。本稿で送り仮名の違いは、文脈の意味の変化に影響しないと考えするため、ここでは取り上げない。
- (29) 佐藤卓己「林美美子の『報告報国』と朝日新聞の報道戦線」(『戦線』中央公論新社、二〇〇六年七月、一四九頁。
- (30) 阪谷希一はか「北支を如何に住みよいところとすべきか(北京座談会三月三十日夜北京ホテルに於て 北支を住みよい天地とするために)」『婦人之友』三二巻五号(一九三八年五月)。
- (31) 同右書、三八頁。
- (32) 同右書、四二頁。
- (33) 同右書、四七頁。
- (34) 復刻版『満洲国及中華民国在留本邦人及外国人人口統計表』(不二出版、二〇〇四年一月) 参照。一九三六年二月末時点の日本人の人口。
- (35) 阪谷希一はか「北支を如何に住みよいところとすべきか」註(30) 前掲書、四〇頁。
- (36) 神近市子「銃後婦人論」註(14) 前掲書、二六頁。
- (37) 高良富子「銃後婦人論——時局下に於ける婦人の思想」『NIPPON』日本版、一卷二号(一九三八年二月)、一二頁。なおここでは「とみ」名ではなく、「富子」名が用いられている。
- (38) 同右書、二二頁。本文に引用した「吉岡、山田女史らの就任祝賀会」とは「国策樹立に關はる諸政府委員には、文政審議会の吉岡弥生女史を初めとし「略」山田わか女史「略」羽仁もと子、大江すみ女史らと「略」数名の婦人委員が選ばれた。政府の御声がかかりで官選委員が選ばれ」たときの祝賀会のことである。
- (39) 神近市子「銃後婦人論」註(14) 前掲書。註(15) にて言及した点について参照されたい。
- (40) 小山いと子「北京」『海を越へて』(一九三九年三月)、五六頁。
- (41) 橋川時雄「北京文化の再建設」『改造』臨時増刊号(一九三八年一月)、一六頁。
- (42) 坂井米夫「ヴァガボンド通信」(改造社、一九三九年二月)の「北京—太原」の三七三頁。
- (43) 小山いと子「北京」註(40) 前掲書、五七頁。
- (44) 清水盛明「対外宣伝と日本人」『NIPPON』日本版、一卷二号(一九三八年二月)、四五頁。
- (45) 早川録鋭発行兼編集「北支在留邦人芳名録」(北支在留邦人芳名録発行所、一九三六年二月)には、「北支第一線に活躍し居る同志」として北平の四十名が登録され、『大阪毎日新聞』北平天津支局長の石川順の名が確認できる。
- (46) 林美美子は「北京紀行」発表の三七年一月、大阪毎日新聞社編集発行の『ホーム・ライフ』三巻一号(一九三七年一月)に「北平の女」も発表している。改造社と大阪毎日新聞社の媒体に揃って作品が掲載されている。
- (47) 谷口綱枝「皇民化政策のなかの「アジア」——血族ナショナリズムの罟」(岡野幸江ほか編『女たちの戦争責任』東京堂出版、二〇〇四年九月)、二五〇頁。
- (48) 羽田朝子『華文大阪毎日』の海外文藝情報欄にみるドイツ占領下のヨーロッパへのまなざし』『叙説』四〇号(二〇一三年三月、二七〇—二七一頁。なお東京日日新聞社は、一九四三年一月第一〇巻第一期より共同発行者ではなくなった。
- (49) 水島治男『改造社の時代 戦中編』(図書出版、一九七六年六月)、一〇九頁。
- (50) 同右書、一九七頁。
- (51) 「戦争と出版物」註(22) 前掲書。
- (52) 本稿では原文「太々們」を「奥さん」として訳している。
- (53) 神近市子「銃後婦人論」註(14) 前掲書にて、神近市子は、「最近林美美子氏が戦線から帰って来られた。林氏は陸軍の従軍文士隊の一人として行

かれた〔略〕私など彼女の報告がのると戦争ニュースよりも先きにそれを  
読んだものであつた」(二五頁)とも述べている。

(54) 林美美子「河は静かに流れゆく」『婦人公論』二四卷九号(一九三九年九  
月)の三四七頁に掲載の広告文より。

(55) 佐藤卓己「林美美子の「報告報国」と朝日新聞の報道戦線」註(29)前  
掲書、二四五頁。

(56) 敗戦の年の一九四五年、「中国之旅」が「中國印象記」と改題されて『新  
生』(一九四五年第二期)に転載されていたことも、註(18)の鄒氏との共  
同調査により明らかとなったが、本稿では日中全面戦争前からアジア太平  
洋戦争開始前までの期間を分析対象としたため割愛した。

(57) 註(38)において示したが、「婦人の地位向上」などが時局に便乗して「知  
識婦人」に期待されたのは、「文政審議会の吉岡弥生女史」「山田わか女史  
〔略〕羽仁もと子、大江すみ女史ら」といった「数名の婦人委員が選ばれた」  
ときの祝賀会であつたが、彼女たちは「名流婦人」でもあつた。

また加納実紀代によると、市川房江や平塚らいてうが国防婦人会を「家  
からの解放」や社会的視野獲得の契機として「(白の軍団「国防婦人会」、  
岡野幸江ほか編『私たちの戦争責任』東京堂出版、二〇〇四年九月、一五  
頁)評価したというが、ここでも市川房江や平塚らいてうのような「著名  
な知識婦人」の目線によって、「(家からの解放)」と言及されている。

(58) 長谷川啓「女性作家のアジアへのまなざし」註(25)前掲書二四〇頁お  
よび、『昭和前期女性文学論』註(25)前掲書の岩淵宏子ほか「はしがき」  
によると、田村俊子は、中国で客死するまで中国女性の解放といった側面  
から『女聲』を発刊し続けた。

付記…本稿は、林美美子の会第三回研究集会(二〇一八年六月三〇日、於立  
命館大学)での報告をもとにしました。会場内外でご教示くださった  
方々にお礼申し上げます。